

徳島大学 総合科学部

(英語名 :

)

資料 1

in·te·grate [ɪntreɪt] — vt. (各部分を) 全体にまとめる ; 完全に作る, 完成する ; (温度・面積などの) 総和を示す ; [数] 積分する ; (会の一員として) 活動に参加する [させる] , 差別待遇を廃止する.

in·te·grá·tion n. 統合, 完成, 集成 ; 人種的無差別待遇 ; 積分 (法) .

< 三省堂『デイリーコンサイス英和辞典』 >

資料 2 「専門主義」の野蛮性

ところが、現実には、自分の狭い視野に閉じこもっている彼らが新しい事実を発見し、彼らがほとんど知りもしない科学を発展させ、それによって、彼らが意識的に知らずにいる思想の総体を発展させている。こうしたことがどうして可能であったのか、そしてまた現に可能なのだろうか？ここで、次のような否定しがたい事実の奇怪さを強調しておく必要がある。つまり実験科学の発展は、その大部分が驚くほど凡庸な人間、凡庸以下でさえある人間の働きによって進められたということである。すなわち、今日の文明の根源であり象徴である近代科学は、知的に特にすぐれていない者をも歓迎し、そういう人がりっぱな仕事をするを可能にしているのだ。……研究者は、そうした方法の一つを機械を操作するように扱えはよいのであり、豊富な結果を手に入れるためには、それらの方法の意味や基礎について厳密な観念を持つ必要はないのだ。こういうわけで大部分の科学者は、巣箱の蜂窩にいる蜂のように、あるいは小部屋に入った火夫のように実験室の小部屋に閉じこもったまま、科学の全般的進歩を後押ししているのである。

しかしこの事実は、きわめて奇妙な人間の一種族を生みだしている。自然に関する新事実を発見した研究者は、当然ながら自分のうちに支配感や自信を感じるはずである。彼は表面的な判断から、自分自身を「ものを知っている人間」だと考えるだろう。……専門家は自分が研究している宇宙の微々たる部分については実によく「知っている」が、それ以外のことについてはまったく何も知らないのである。……専門家は知者ではない。というのは、自分の専門以外のことをまったく何も知らないからである。と言って、無知な人間でもない。なぜなら、彼は「科学者」であり、彼が専門にしている宇宙の小部分についてはたいへんよく知っているからだ。われわれは彼を知者・無知者とでも呼ばねばならないだろう。これはきわめて重要なことである。というのは、そうした人間は自分が知らないあらゆる問題についても、無知者として振舞わずに、自分の専門分野で知者である人がもつ、あの傲慢さで臨むことを意味しているからである。……文明が彼を専門家に仕立てたとき、彼を自分の限界内に閉じこもり、そこで満足しきる人間にしてしまったのだ。しかし彼の心のうちにあるこの自己満足と、自分は有能だという感情は、彼をして専門外の分野をも支配したいという気持に導くだろう。……以上のことは空論ではない。今日、政治、藝術、宗教および生や世界に関する一般的問題について「科学者」が、そし

もちろん彼らに続いて医者、技師、財政家、教師等々が、いかにはかげた考え方や判断や行動をしているかは、その気さえあれば誰にでも観察できることである。私がくり返し大衆人の特徴として述べてきた「他人の言葉に耳を傾けない」、より高度の審判に従わないという性向は、ほかでもなく、部分的資質を持ったこれらの人びとにおいてその極に達しているのだ。彼らは今日の大衆支配を象徴すると共に、その大部分を構成している。そして、彼らの野蛮性こそがヨーロッパの墮落の最も直接的な原因になっているのである。……………この補償のない一方的な専門化がもたらした最も直接的な結果は、今日、かつてないほど多数の「科学者」がいるにもかかわらず、「教養人」は、たとえば一七〇〇年ごろに比べてもはるかに少ないという事実となっている。……………科学は自分自身の成長を有機的に調整するために、ときに再編成を必要とするからであり、そしてその再編成は、前に述べたように、総合への努力を必要としているからである。しかもこの仕事は、知識全体の広範な領域とますます関係を深めつつあり、日ごとに困難になっているのだ。

(オルテガ『大衆の反逆』<原著一九三〇年 桑名一博訳 白水社版>)

資料3 国立大学新構想学部の歩み

1. 東京外国語大学外国語学部（1949）
大阪外国語大学外国語学部（1949）<現在 大阪大学 外国語学部>
3. *東京大学教養学部（1949・1951専門課程）
4. 埼玉大学教養学部（1965）
5. *広島大学総合科学部（1974）
6. *岩手大学人文社会科学部（1977）
7. *三重大学人文学部（1978）
8. *徳島大学総合科学部（1986）<Faculty of Integrated Arts and Sciences>
9. *福島大学行政社会学部（1987）
10. *京都大学総合人間学部（1992）
*神戸大発達科学部（1992）
*神戸大学国際文化学部（1992）
13. *群馬大学社会情報学部（1993）
*名古屋大学情報文化学部（1993）
<徳島大学総合科学部改編、二学科体制>
15. *宇都宮大学国際学部（1994）
*岡山大学環境理工学部（1994）
17. *静岡大学情報学部（1995）
18. *岐阜大学地域科学部（1996）
*佐賀大学文化教育学部（1996）
20. *長崎大学環境科学部（1997）
<徳島大学総合科学部改編、三学科体制（2009）>
<徳島大学総合科学部文系に特化（2016）>

【*は国立大学新構想学部教育・研究フォーラム設立時から参加している大学】

資料4 「地域研究とは何か」

1、地域研究の台頭

地域研究が、わが国で喧しくなったのは、第二次世界大戦の終了後であるが、それもとくに注目されてきたのは、アジアやアフリカへの関心がたかまった一九五〇年代の後半になってからともいえよう。

すなわち、戦争の落し子のような状態で、東南アジアなどの民族主義運動が活発になり、我々が再び関心をふり向けたとき、戦前からアメリカでさかんであった「地域研究法」(area studies method)による、接^{アプローチ}近のやり方を知らされたといってもいい。

そうしたなかで、私には一つの個人的な回想がある。それは、勤務していた東京外国語大学の発足(一九四九年)、すなわち新制大学への切替えにまつわるところの思い出である。当時、文部省に申請した大学設置構想が、進駐軍教育部より外国語を中心として専攻する大学を批判されて、設置開始が停頓したとき、我々の耳に入ってきたのが、「外国研究」(foreign studies)という言葉と、その方法としての地域研究であった。アメリカが第二次世界大戦に遭遇するにあたって、急いで採用したのは、それまでアメリカに芽生えていた地域研究による、対象地域の研究理解と地域言語の集中的訓練の方法であった。

そこで、我々は外国語学校、外事専門学校(戦時中改称)の伝統を引きつぎながら、新制外国語大学の基本構想を、日本ではまだ開発されていない「外国研究」の教育研究機関の発展に楫をむけたのであった。

……………(中略)……………

すなわち、上述の人々が地域研究について、先ず指摘していることは、それが決して第二次世界大戦に遭遇したアメリカの国家的理由(national reason)からのみ発生、発展したのではないということである。そこには、学問的理由(scholarly reason)があると、言う。すなわち、すでに前章の末尾においても言及した如く、それは一九世紀以来学問が極度に専門分化したことへの償いであるとする。それが、いわゆる地域研究法の特徴とする、諸専門分野の交叉し、統一された研究、すなわち cross-disciplinary とか、inter-disciplinary とかいはれる、または最近はやりの「学際的」であるところの integrated studies (総合的研究)という点である。

そして、そうした地域研究の傾向を、大学教育における「一般教養」(general education)の台頭という二〇世紀の新傾向と結びつけて考究しているホール教授と同じく、ライシャワー氏等も大学の研究教育における、「戦後の革新」(a postwar innovation)とのべている。学問研究の特殊化(specialization)、専門化(departmentalization)というヨーロッパ大陸風の伝統に対し、専門知識の統合(integration)によってこそ、生きた対象を把握することができる。そうしてこそ、我々はある対象地域への「全的な接近」(the total approach to an area)が可能となるとする。孤立的事実(isolated facts)にかかわる知識を、全体的な知識(total knowledge)に高めるために、学際的な地域研究の方法が必要となるのだとする。

しかし、諸専門の統一ということは、言うは易いが、行なうことが難しいのは周知のとおりである。地域研究を貶価し、攻撃する人々の論議の多くは、前にのべたアメリカの対外政策という実利的な目的と共に、この総合化という点にかかわっている。

ホール教授は、総合研究を共同作業、すなわち英語での group research、group participation、block system などの言葉で指摘しているが、それがいかに困難であるかについても、彼自身の痛感を強調している。このことは、いやしくも学問、研究にたずさわるものは誰でも、理解し得るところであろう。それゆえに、ライシャワー教授は、いみじくもつぎのようにのべる。「我々の短い経験では、地域研究は従来の古い諸科学—人文諸科学、言語学、社会諸科学および自然科学の若干—による研究の、単なる結合 (combination) として現われている。まだ新しいものの創造 (creation) とはなっていない。新しい方法が現われるまでには、まだ相当の時間を必要とするであろう」。

(河部利夫『外国学ことはじめ』(玉川大学出版部 1979))

資料5 「接近」の達成

3、境界人

社会化することによって、我々は相手の人々と仲間関係をつくることができる。国内では相手の社会への成員であることが許されるのである。外国接近では、少なくともある目的に関して(共同目的をもって)、仲間集い (socialization) あるいは対話グループをつくることができる。それは孤立、孤独に対置するものであり、国際活動を最も容易ならしめるあり方であることはいままでもない。

このように、わが身を形成した人間を「境界人」(marginal man) という。…境界人とは、対象とする外国へのわが身の社会化に努力することによって、相手社会の人々に許容され、話合いのできる人と思われる存在である。そして、境界人(C)には相手の社会にも応ずる境界人(C')が居るのが特徴的である。すなわち、それは相手社会での理解者、協力者あるいは現地企業運営などの場合での helper, assistant, foreman, informant などと言われるものでもある。

境界人は、決して言わば脱日本人ではない。しばしば誤った主張としていい「骨を埋める」という人であってはならない。境界人とは、相手の社会をよく知り、理解し、自己社会と対照比較して行動できる人間である。そして、またよく考えてみなければならないのは、「郷に入れば、郷に従え」といういいならわしで、外国接近を教訓しようとするものである。しかし、私には「郷に従え」ということばは、「骨を埋める」という訓辞と同義語に聞こえてならない。それは、国家利益の追求のため、尖兵となる日本人の現地同化を強要するてい古き対外政策上の言辭以外の何ものでもないとしていいと思う。

境界人とは、社会間距離を凝視しながら、二つの異文化社会の交錯をわが身のなかで、弁証法的統一を行なおうとする苦しい闘いに挑戦する存在なのだ。そういう意味において、世にいう「国際人」とは、まさに境界人的存在をさすべきものとしたい。異文化社会の接触、交流のなかにあって、断絶する距離、深い深淵、異質を隔てる厚い壁をのりこえ、両社会に通じ合うものを把握する人間こそ、真の国際人というべきであろう。

(河部利夫『外国学ことはじめ』同前)